

尾道の空き家、再生します

江戸川大学卒業生、NPOで活躍中

レポート #6
駒木祭
2015.11.2~3

駒木祭は、江戸川大学と江戸川大学総合福祉専門学校が共催する学園祭。

11月3日に開催された、ローカルデザインがテーマの「あたらしいアタマの使い方」フォーラムに登壇した江戸川大学卒業生神田太郎さんにインタビューをした。取材・文：有野弘崇 写真：田中啓臣

社会学部現代社会学科などが主催したこのフォーラムでは、日本各地でローカルデザインを手掛けている

専門家や本学教員を含めた6人が、地域を再生する方法について活動報告や議論を行った。

そのなかのひとり、神田さんは江戸川大学を2012年に卒業し、現在NPO法人尾道空き家再生

プロジェクト(以下・同法人)のメンバーだ。神田太郎さんは、ライフデザイン学科(現・現代社会学科)の鈴木教授の下

で、都市計画や街づくりを研究した。卒業論文では広島県尾道市の環境保全に取り組んでいる同法人をテ

マに選んだ。この団体は、空き家を活用してコミュニティの場をつくる目的で2007年に設立された。

同法人は、「空き家×?」というコンセプトを掲げ活動している。「?」には、「建築」「環境」「コミュニティ」「観光」「アート」の5つのテーマが設定されている。「空き家」と掛け合わせることで様々な人との交流が生まれることを目的としている。

取って、廃材や古材や古道具を活用し、古い木造建築の小学校を思い出させる内装になっている。「お昼ご飯を食べたあとに、あくびがでたら、あくびカフェで和もつかないという感覚で利用してもらえたらいいですね。」

卒論が縁で尾道に移住

神田さんは大学4年の時に、同法人主催の夏合宿に参加した。そこでスタッフに出会い、1か月間尾道に滞在し卒業論文を書き上げた。その後、大学と尾道を行き来しながらボランティア活動を続けた。卒業を機に尾道に移住、2012年4月から、スタッフとして活動している。

人々や若い世代の旅人に向けてた簡易宿泊施設だ。大型空き家の再生活用と若者の雇用の創出が目的につくられた施設である。

神田さんが中心になって取り組んでいることもあって、それが、空き地再生プロジェクトだ。空き家を撤去して荒れた空き地を活用し、公園や菜園を手作りしているのだ。

現在、同法人が設置・運営している「空き家×観光」のコンセプトを現実化した施設「あなごのねご」のスタッフを務めながら空き家の再生サポーターなどもしている。

なぜ、あなごなのか。「うなぎのねご」だったら、京都の町家。尾道の町家も京都と同様に間口が狭く奥に長い。さらに、あなごが特産品であることから、尾道のPRもかねて「あなご」にした。「名前ひとつで宿だな、ゲストハウスだなどわかるとおもいます」と神田さん。

このイベントでは、近所から頂いた大きな犬小屋を改修して子供が入れる「こびどの家」として再生するなど、ほかにもさまざまな取り組みをしている。

「あなごのねご」は、尾道絵のまち通りにある空き家をリフォームした外国

テーマとした喫茶兼交流スペース「あくびカフェ」がある。もともとは眼鏡店だった。床や天井を剥ぎ

「月に1回ですが、次世代にバトンを繋ぐ」と神田さんは語った。



上 神田太郎さん 中下左から鈴木輝隆特任教授、梅原デザイン事務所主宰の梅原真さん、NPO法人 atamista 代表理事の市来広一郎さん、企業組合八幡平地熱活用プロジェクト代表取締役船橋慶延さん、本学講師清野隆さん。活発な発言が揃った。右 100人以上の来場者が詰めかけ、盛況だった。

